研究計画

研究主題

「生徒の自己指導能力を育成するための開発的･予防的な生徒指導の研究」

～生徒指導の三機能を生かした授業・学級づくり～

1　研究主題にかかる基本的な考え方

（1）目指す生徒像

本校の学校教育目標は「自己指導能力を高め、自ら課題解決できる生徒の育成」である。学校は集団で学ぶ場である。仲間と共にかかわり合いながら学ぶことを重視したい。また、学習を通して、「課題解決できる力」を育てることが重要であると考える。生徒が将来社会に出たとき、人の役に立ち、自己実現を図っていけるように、様々な課題に対して柔軟かつたくましく対応し、社会人、職業人として自立できる人間になってほしい。そのためには、自ら課題を発見し、課題解決に向けて考える力、そして自らの考えを表現する力、さらにそれを実行するための行動する力が重要であると考える。急速に変化する社会の中で、社会の一員として、人生における様々な課題に立ち向かい、たくましく生き抜くことができる基盤づくりとして、「自ら課題解決できる生徒」を育てていきたいと思っている。

本校の生徒は、素直で優しく、与えられた課題は真面目に取り組むことができる。しかし、さらなる成長のために、自ら課題を見つけることができる生徒、自分の考えを積極的に述べることができる生徒、主体的に行動することができる生徒を目指したいと考え、本校の育成したい生徒像を次のようにした。

育成したい生徒像

（1）自らの課題を発見し、仲間と関わりながら解決できる生徒
（2）教育活動全体を通して、社会変化に対応できる多様な選択肢を持てる生徒
（3）その場、その状況に応じた最適な判断をし、適応できる生徒

生徒の良さを生かし、目指す生徒像に向けて学校教育活動の充実を図りたい。このためには、図書館教育や生徒会活動、学級づくり等に取り組むと共に、特に授業を中心に育成していくことが大切であると考える。

（2）教育課程の目的･ねらい

教育課程の目的･ねらいは、**〈学力の3要素〉**を育むことである。日々の授業のなかで、これらの学力を生徒に身に付けさせることを目指していかなければならない。「教師の指示で学習内容が進む授業」と「生徒が見通しをもって学習を進める授業」との両者をバランス良く位置付けることが大切である。

〈学力の3要素〉とは、

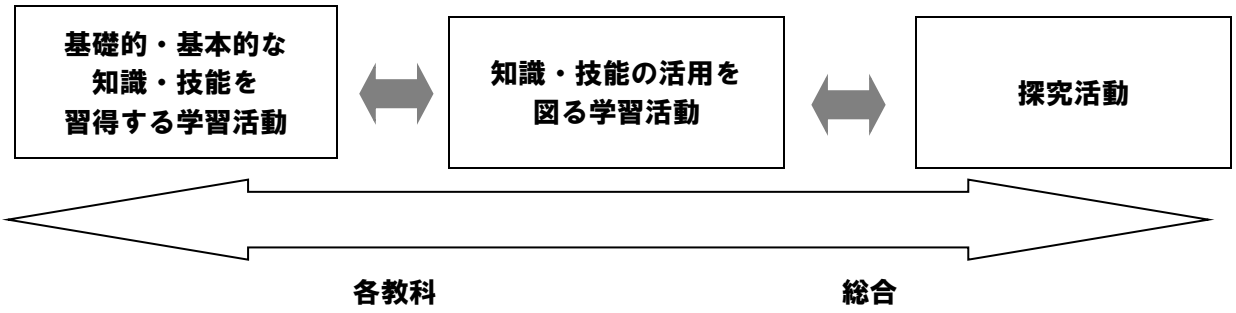
・基礎的な知識・技能
・思考力・判断力・表現力
・主体的に学習に取り組む態度（学習意欲）である。

〈学力の3要素〉を育む手立てとして、次の３つがある。これらの手立てを重視して、生徒の実態、学校の特色を生かしながら、特色ある教育課程を編成していく必要がある。

①習得・活用・探究

習得・活用・探究の３つの活動はステップではなく、それぞれが大切である。

習得したことは、使っていくこと（活用）によって、定着・向上する。知識・技能の活用を図る学習活動では、とくに言語活動が重要である。



②言語活動の充実

各教科で、その教科の言語活動とは何なのかを考え、言葉の力を育てていく。

〇言語活動は、すべての学習の基盤である。すべての教科等で、言葉の力を育てることを一層重視することが大切である。

〇各教科等の目標を実現するためには、言語活動を適切に取り入れることが不可欠である。特に、思考力・判断力・表現力を育てるうえで重要である。

③目標に準拠した評価

評価することが目標ではない。学力の３要素をはぐくむために、C 評価の子どもを少なくしていくことが目標である。各教科のねらいにふさわしい評価規準を考えるとともに、C評価の子どもに対する手立てを考えていかなければならない。

（3）自己指導能力の育成と開発的な生徒指導

①自己指導能力

自己指導能力とは、「日常生活のそれぞれの場において、他者との関わりの中で、課題を見出し、どのような選択が適切であるかを自分で判断し、意思決定を行い、決定したことを責任をもってやり遂げ、自己実現を図る力」である。この自己指導能力を育成するのは、学習活動を含む学校生活のあらゆる場面や機会である。生徒が自ら目標を立て、その目標を達成するために、自らの行動を決断し実行する。そして、そのことについて責任をとるという経験を積み重ねていくことが大事である。つまり**自己指導能力の育成**を図るには、**＜生徒指導の三機能＞**をすべての教育活動に作用させることが大事となる。

②開発的な生徒指導

生徒指導では、学級・ホームルーム活動における集団指導、様々な場面における個別指導等の中で、**自己指導能力の育成**を目指し、**生徒のもつ力やよさを引き出し伸ばす開発的な指導**を行い、生徒同士の中に望ましい人間関係をつくるとともに、人権感覚を涵養していくことが重要である。このことは、暴力行為やいじめ等の生徒指導上の諸課題の未然防止にもつながる。

自己存在感や自尊感情を高めること、受容的・共感的・支持的な人間関係を育成すること、自己決定力や責任感を育成すること等を内容とする人権教育の取り組みと、開発的な生徒指導の取り組みと歩調を合わせて進めることで、より大きな効果を上げることが期待できる。

（4）生徒指導の三機能

①自己存在感を与える

自己存在感とは、自分は価値ある存在であるということを実感することである。そのために、教師は一人ひとりの生徒をかけがえのない存在としてとらえ、指導することが大切である。生徒の独自性や個別性を大切にした指導が必要である。

例　・認める　褒める　励ます　・まちがった発言でも大切に扱う
・係活動、委員会活動、部活動等で活躍の場を与える
・一人ひとりにあったコメントを書く
・授業のどの場面でどの生徒を生かすことができるか考えておく

②共感的な人間関係を育成する

共感的な人間関係とは、相互に人間として無条件に尊重し合う態度で、ありのままに自分を語り、理解しあう人間関係をいう。そのためには、教師が自己開示をし、「指導する人と指導される人」という関係ではなく、「人と人」という関係を創りだすことが大切である。生徒と教師、生徒同士、教師同士、そして保護者・地域と教師等、これらの人間関係を温かいものに築き上げていくことが大切である。

例　・生徒間の交流を促す　・互いのよさを認め合う場をつくる
・行為の背景にある気持ちに寄り添う　・生徒の発言や話を最後まで聴く
・教師からけじめのある態度を示すよう努める（チャイムで授業を始める等）

③自己決定の場を与える

自己決定とは、「生徒が決められたことを決められたとおりにやるということではなく、自分で決めて実行する」ということである。そして、「常に『相手』と『自分』を見据えて行動すること」が求められる。つまり、自分勝手な「自己決定」ではなく、他の人々の主体性を大切にすることを根拠にして、自分の行動を考えなければならない。また、「教師が生徒の自己決定を多く取り入れる教育実践をするためには、教師の指導性が必要」とされる。生徒がどのような「自己決定」をするのか、教師の指導の中で選択の幅を示すことや、生徒自身で責任のとれる範囲内で認められるものである。

例　・考える時間を十分に与える
・目標や決まりを生徒自らが決め、行動に責任をもてるようにする
・評価の場面を設定し、達成感を与える

（5）研究主題について

上記をもとに、本校の研究主題を「生徒の自己指導能力を育成するための開発的･予防的な生徒指導の研究～生徒指導の三機能を生かした授業・学級づくり～」とした。

まず、本校の育成したい生徒を育てていくには、教育課程のねらいである学力の３要素を大切にしたこれまでの研究成果を基にして、本年度は生徒の自己指導能力を育成するために、**生徒指導の三機能をすべての教育活動に作用させていくこと**が取り組みの柱となる。これまでの研究の成果のひとつである新学習指導要領が目指す「資質・能力の育成」の理念に則った**「愛宕の生徒に身につけさせたい力」はまさに生徒の自己指導能力を育成する際に有効に活用できる**ものである。資質・能力は本来生徒一人ひとりの内に秘めているものであり、教育活動により、それらを

表に出すものと考えてきた。この考え方は開発的な生徒指導と重なるものであり、本校の実践をさらに発展させていきたいと考える。

本年度は、生徒指導の三機能を各教科、特別の教科　道徳、特別活動（学級活動）、総合的な学習のすべての教育活動に作用できるよう取り組んでいく。また「タテ持ち」方式による実践研究４年目は引き続き５教科で研究する。

それぞれの教科・領域の特性に鑑み、これまでの研究をもとに、研究主題に迫りたい。

①　質の高い授業

〇生徒にわかる授業

〇質の高い授業を目指す８つのポイントに基づく授業

〇知識・技能を活用して考えさせる授業

授業研究では次のことを重視して、思考型授業を研究することを確認しあった。

－思考型授業の取り組みの共通理解－

◆　思考対象の明確化（学習課題等）
その時間に何をやるか、何を考えるか、授業の目標、見通し等を明確にする。

◆　思考過程の共有（言語活動、板書の工夫、思考ツールの工夫）
知識・技能の活用への手立て
考えの説明、発表、討論、ペア、グループでの意見交換等、かかわり合いによる思考のプロセスを板書で効果的に可視化する。

◆　思考結果を表現（まとめ）
その時間のまとめを生徒自身のことばで記述する。また、板書でも掲示する。

＊　授業について肯定的評価を行う。

・これまで学んだ知識・技能を生徒自らがストックし、活用できるようにする。
・生徒が考えたくなる、語りたくなるような教材や発問の工夫
・学習課題と思考過程、まとめの明確化
・具体物の提示
・形成的評価の重視（授業の最後に小テスト等で確認をする。）
・何を学んだかが生徒自身にわかる。
・生徒自身が今どういう状態であるのか、どうしていけばいいのかわかる。（メタ認知）
・教師が一方的に説明をする授業から生徒が見通しをもって進める授業へ

〇授業は積極的な生徒指導

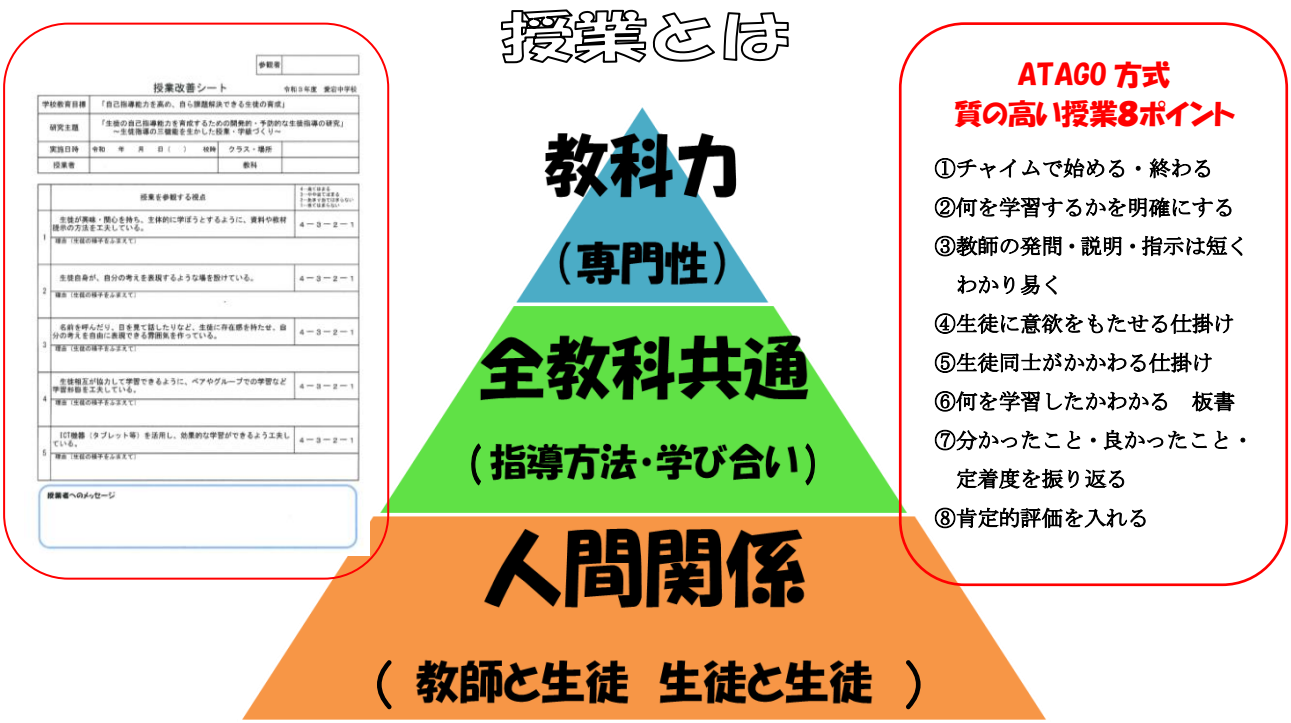
・生徒への肯定的評価、声がけ、机間指導、ＫＲ（応答）
・個々の学習状況の把握とつまずきの早期発見
・教師が何よりもその授業（教科）が好きである、常に自分の授業を振り返り研究する。
・オープンエンドな終わり方
生徒が次の授業が楽しみになるような終わり方をする。

②　生徒同士がかかわり合う授業

・さりげない優しさで結ばれたかかわり
・わからないことを尋ねることができる関係
・尋ねられたとき、誠意を持って答えてあげられる関係
・個→グループ→全体→個
・個々の生徒の理解や思考を深めるために、学力定着のために、かかわり合いがある。

生徒同士がかかわりあって学ぶ
＜教師の役割＞
「つなぐ」＝仕掛け
1　考えと考えをつなぐ
2　生徒と教材をつなぐ
3　生徒と生徒をつなぐ

＊３～４人の小グループでかかわり合う。学習集団を固定化せず全員が話すこと。
・日常の生活でのかかわりを大切にし、授業に生かす。
・生徒同士のかかわりは、教師がつくるものである。教師との信頼関係が大事である。
・かかわり合いの中での生徒間の話を教師がよく聴く、つなげる。（教材と、他の生徒と）
＊生徒が受け止めてもらったと感じると意欲が高まることに留意する。



研修を進めるにあたっては、全教員が授業について協議することを通して、これまで次のような共通理解を図ってきた。

授業は、「教科力」「全教科共通の指導方法の工夫、ペアや小グループによるかかわり合い」「人間関係」の３つによって成立する。

１つ目の教科力については、より良い授業を行うにあたって、なくてはならない教師の専門性である。これが各教科のねらいを達成するうえで、最も重要であると考えている。互いに切磋琢磨しながら専門性を高めていこうと確認し合った。

２つ目の全教科共通の授業づくり、かかわり合いや指導方法の工夫については、毎日の授業や校内研修で培うものである。本校では、「質の高い授業８ポイント」を共通項目として授業づくりを進めてきた。この内容は、①チャイムで始める・終わる②何を学習するかを明確にする③教師の発問・説明・指示は短くわかり易く④生徒に意欲をもたせる仕掛け⑤生徒同士がかかわる仕掛け⑥何を学習したかわかる板書⑦分かったこと・良かったこと・定着度を振り返る⑧肯定的評価を入れるという８ポイントである。これらは、当たり前と思いながらも実際のところチェックしてみると難しいものだと思われる。授業者は日頃から常にこの８ポイントをチェックする。校内研修では、見る側もこれを意識しながら見て、更にこのような８ポイントのチェック表が入った授業改善シートと指導案と座席表の３セットをもって参観し、記入していく。事後研はこれをもとに授業後の話し合いがなされ、授業者はその後、参観者からこのシートをもらって、個人の反省と照らし合わせながらまとめ、次時の授業に臨むという研究体制をとっていく。

３つ目に、人間関係づくりについては、教師と生徒、生徒と生徒同士の関係が信頼し合えるものであることが大切である。この関係づくりを授業でつくることが重要である。また、学校全体での道徳教育の取り組みが大事である。日常生活での会話・教育相談やエンカウンターを全校的に取り入れて、よりよい授業の土台となる学級づくりをしていく。

分からないことを言えたり、共感しあえるような人間関係づくりと、全教科共通の指導方法やかかわり合い、肯定的評価を効果的に入れて、教材に引き込ませたり、生徒が学びたくなるような教

材への出会いを提供したりするなどの授業づくりを大切にしたいと思っている。

2　研究組織

（1）　授業づくり　学年主任会と教科主任会は隔週で週 1 回開く。

①　研究の方向性を確認、授業づくり（探究的な学習）の研究、ICT を活用した授業づくり、学習課題設定の工夫、関わり合い、言語活動の充実のため、考える力を育てる教科指導の工夫（思考ツールの活用など)、振り返りの充実、3 部会からの報告、小中連携の推進など

②　教科主任会は 5 教科の教科主任と主幹教諭・研究主任で構成する。
全教科主任会は全教科主任と主幹教諭で構成する。
各教科の取り組みや状況の共有、生徒指導上の共有、授業評価等の共有や、項目等についての検討や交流など

③　教科部会
教科の進捗状況の確認、指導内容や方法の共有、教具や副教材（自主プリント）等の共有
授業評価等の実施や分析・改善について、定期テストの作成、単元ごとに「身につけたい力」やその取り組み方について確認、授業改善プランの計画・進捗状況の確認・検証、授業研に向けた指導案の検討、ルーブリック評価について検討、生徒の実態把握、各調査の分析、入試対策、研修報告など

（2）　授業研究　公開授業とその事前・事後を通して研究を深める。

3 研究内容

（1）　授業研究【学年主任会・教科主任会】

（2）　道徳の授業研究【道徳部会】

（3）　学級活動の研究・教育相談【特活部会】

（4）　総合的な学習の時間、コミュニティ・スクール、地域ぐるみ教育の充実【総合部会】

（5）　家庭学習の定着

（6）　終学活の活性化

（7）　読書活動の推進

（8）　小中連携の取り組み

（9）　５Ｗ１Ｈの徹底（授業・生徒集会等）

(10)　タブレットの活用

4具体的な取り組み

研究主題に基づいて、生徒の自己指導能力を育成するために生徒指導の三機能をすべての教育活動に作用させていく。

（1）「生徒に身につけさせたい力」（表１）

① 設定理由

新学習指導要領では、「子どもたちが未来社会を切り拓くための『資質・能力を一層確実に育成』する。その際、子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視する」とある。さらに、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」を通して「何ができるようになるか」を明確化することが挙げられている。

本校では、平成 28 年度から探究的な授業づくりのための教育課程研究実践事業の指定を受け、研究を推進する中で、本校の生徒の実態を洗い出し、本校の生徒が社会に出て自分の人生を切り拓いていけるために必要な具体的な資質・能力を文言化した。具体的に文言化することで、教員同士が同じ目標に向かい、各教科・領域の関連性を意識した教育活動が出来ると考える。また生徒と共有することで、生徒も自分の成長を客観的にみる視点をもち、メタ認知能力が育成できると考えた。これは自己指導能力の育成と重なるものである。

② 具体的な取り組み

ア 「生徒に身につけさせたい力」を意識化する。

・掲示物として各教室・特別教室・校舎内の掲示板に掲示する。

・年度当初の学級開き・授業開き・総合的な学習の時間のオリエンテーション等で生徒に説明する。

イ 「生徒に身につけさせたい力」を意識した授業づくりを進めていく。

・各教科・領域の教育計画の教科目標に、より明確に関連する項目を記載する。

例）英語

〇英語を読んだり書いたりする時に、既習事項や辞書を適切に使うことができる。（情報活用力）

〇初歩的な英語を使って、ペア、小グループ、学級で気持ちよくコミュニケーション活動ができる。（協働力・人間力）

・各教科・領域の各単元において、どのような力が関係するのかを、教科部会で確認をして年間計画を作成していく。実践する中で、年度途中で修正をかけていく。

・研究授業の指導案に、関連する力を明記する。

ウ 「生徒に身につけさせたい力」を使って振り返りを行い、次の目標を持たせる。

・各教科、総合的な学習の時間の単元の終わりと、学校行事終了後の反省の時に、この力について振り返りを行う。その際に、生徒になぜその力がついたのか理由を書かせ、さらに学級で発表をさせて、自己評価及び他者評価も入れて、自己理解を深めさせ、自己肯定感を高めさせる。

・振り返りの結果から、生徒は学校生活における次の目標を自己決定し、指導者は次の指導に生かしていく。